

## 夏季離島実習 事後レポート

今回、ファミリークリニックネリヤと県立大島病院で実習をさせていただきました。台風接近のため、行きの船は大きく揺れることもあり、よく眠れませんでした。船での移動の大変さを感じました。ネリヤでは、外来や訪問診療、訪問看護を見させていただきました。初日にネリヤの行動理念「生命（いのち）を癒し、生活（くらし）を支え、人生の最期（たびだち）まで寄り添う、」という三つの LIFE について説明してもらいました。先生の患者さんは0歳からお年寄りまでいて、疾患も様々でした。診察をするとき、患者さんの意思や年齢、家族構成などあらゆることを総合的に考えて治療を行ったいるのが印象的でした。薬の量や回数は患者さんやそのご家族と話し合ったうえで、処方箋を出していました。先生は、90歳の患者さんに言うことと、50歳の患者さんに言うことは違うと教えてくださいました。50歳の方は規則正しくして臓器をなるべく休めるようにし、90歳の方は好きなものを好きだけ食べてよいといったように、そのことは食事の指導に顕著に表れていました。その人の三つの LIFE を考えた時に必然的にそうなるということでした。また、心づもりをすることで、心残りを減らすことができるという言葉が印象的でした。終末期の患者さんの訪問診療に行かせていただいたとき、患者さんの家族に最期が近いことについてプリントを使って、わかりやすく説明したり、質問を受けたりしていました。先生が時間をかけて丁寧に、患者さんにご家族に向き合っていると感じました。後日、2人の医療スタッフの方とその終末期の患者さんの訪問看護に行かせていただきました。血圧や体温などの体調管理や吸入、座薬などを行ったり、身の回りのことをしたりしていました。さらに、その日はご家族が入浴を希望されており、そのことについて先生に連絡を取っていて、訪問看護は患者さんやご家族と先生をつなぐ役割もあるのだと気づきました。

県立大島病院では、麻酔科を見させていただきました。その日は、麻酔科医の先生が二人と研修医の先生が二人、札幌から応援で駆け付けた先生がいました。麻酔科の先生が全然足りず、応援で来てもらうことがしばしばあるとのことでした。先生方がゆっくり休む暇がないくらい忙しくされていて、医師不足の現状を実際に知ることができました。

実習を通して、先生と患者さんの信頼関係の強さを感じました。先生は、地域の行事に積極的に参加しているようで、その時の話を患者さんとしていて、患者さんとの距離の近さを感じました。外来診療が始まる前に診察室で、地元の新聞に目を通しているのを見ました。患者さんの日常まで知ることにより医師と患者さんの距離が近くなり、信頼関係が築けているのではないかと思います。

俳句：先生と あいさつ代わりに 踊りだす

この俳句は、はっきりと言葉が出ない終末期の患者さんのところに訪問診療で訪ねたとき、患者さんと先生が手だけ踊りだした様子を詠みました。訪問診療を受けている患者さんのほとんどは体が不自由でした。先生が来ると、顔が明るくなる方が多くいるように感じました。踊りだす様子から、患者さんが今日元気だよ、来てくれてありがとうと伝えているような感じがしました。私も将来、患者さんが、来てくれることを待っていてくれるような医師を目指したいと思いました。